

研究指導 青木 孝弘 講師

# 会津本郷焼の現状分析

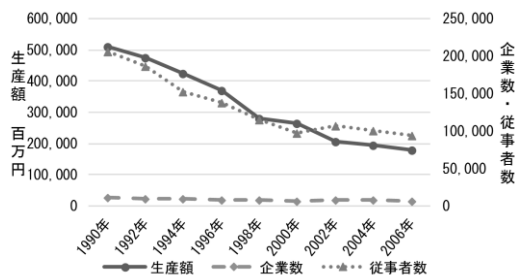
## —1982年と2017年の比較調査から—

富永 清楓

### 1. 研究背景

現在、日本には1200品目もの伝統工芸品がある。経済産業省(2008)によれば、生産額は1990年で5,081億円であったが2006年には1,773億円と約3分の1にまで減少している。また、企業数は1990年の2万6,490社から2006年には1万6,704社へと約1万社の減少が見られる。従事者数においても、1990年の20万5,568人から2006年には6万9,635人へと大幅な減少が見られる(図表1)。

図表1 伝統的工芸品の生産額と企業数、従事者数の推移



(出所)経済産業省 (2008)より筆者作成

### 2. 伝統的工芸品とは

#### 2.1 定義

経済産業省(2008)によると、伝統的工芸品とは、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律(伝産法)」に基づき、経済産業大臣が指定した工芸品とある。伝統的工芸品への指定の条件として、以下の5つがある。

- ①主として日常生活で使われる工芸品であること。
- ②製造工程のうち、製品の持ち味に大きな影響を与える部分は、手作業が中心であること。
- ③100年以上の歴史を有し、今日まで継続している伝統的な技術、作法により製造されるものであること。
- ④主たる原材料が原則として100年以上継続的に使用されていること。

⑤一定の地域で当該工芸品を製造する事業者がある程度の規模を保ち、地域産業として成立していること。

現在、伝統的工芸品に指定されているのは全国で222品目であり、福島県では4品目が指定されている。(経済産業省 2015)

#### 2.2 伝統的工芸品の現状

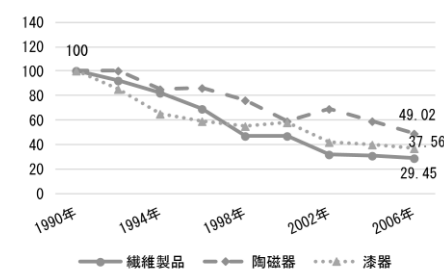
上述のように、現在、伝統的工芸品産業全体としては生産額と企業数、従事者数において減少している。次に品目によって違いがあるかどうかを調べたのが図表2から図表4である。1990年時点の繊維製品、陶磁器、漆器の生産額、生産額、従事者数を100%として2006年までの変化を表したものである。

生産額の推移を表した図表2からは、1990年から2006年までに繊維製品、陶磁器、漆器すべてが半分以下に減少していることが分かる。

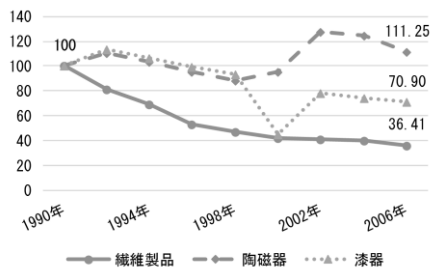
次に企業数の推移を表した図表3からは、2000年までに繊維製品、漆器において減少が見られる。しかし、陶磁器は2000年から増加し、2006年には1990年の企業数の数よりも上回っていることが分かる。

最後に従事者数の推移を表した図表4からは、繊維製品、漆器、陶磁器において減少していることが分かる。しかし、陶磁器は2000年から2002年の一時期は増加していたことが分かる。

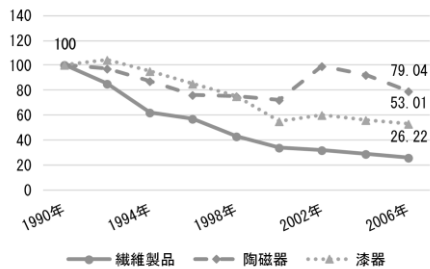
図表2 生産額の推移



図表 3 企業数の推移



図表 4 従事者数の推移



(出所)経済産業省(2008)より筆者作成

### 3. 先行研究

統計から陶磁器は、繊維製品や漆器とは違った発展を見せているが窯業の問題を扱った先行研究としては、本郷焼(福島県)を対象にした内海(1982)と佐々木(1982)がある。内海(1982)は本郷焼従事者への調査により、労働問題、中高年労働者ならびに女子労働者の賃金格差の問題を明らかにした。また、佐々木(1982)では、窯業従事者の、生活の意識の実態を調査、本郷焼と町そのものの発展に向けた課題を考察している。

伝統的工芸品産業審議会(2000)では、伝統的工芸品産業の売上が低迷している要因として次のものをあげている。まず、外的要因に国民の生活様式、生活空間の変化や生活用品に対する国民意識の変化、大量生産による良質で安価な生活用品の供給、安価な輸入品の台頭である。内的要因は生活者のニーズに適合した商品開発の遅れ、新しい流通経路開拓が遅れ、知名度不足、情報提供不足である。

### 4. 本研究の目的

本研究では、本郷焼を対象に 35 年前に福島県立会津短期大学地域総合調査室<sup>1</sup>で行われた研究(内海、

佐々木;1982)と現在との比較をし、本郷焼の現状と直面している課題について考察する。

## 5. 調査

### 5.1 アンケート調査

#### 5.1.1 アンケート調査の概要

内海、佐々木(1982)をもとに調査票を作成し、会津本郷焼事業協同組合に加盟している窯元を対象にアンケート調査を実施した。

調査期間:2016年12月22日～2017年2月3日

調査対象:会津本郷焼事業協同組合に加盟している窯元 15 社(ただし碍子関係会社 2 社を除く)

#### 5.1.2 アンケート調査の結果

有効票数は 11 社で、有効回答率は 84%である。

図表 5 従業者の要約統計量

	標本数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	合計
従事者数(男性)	11	2.36	3.91	1	0	14	26
従事者数(女性)	11	2.18	3.28	1	0	11	24
平均年齢(男性)	9	55.06	16.50	54.5	30	91	-
平均年齢(女性)	7	52.29	14.44	54	28	67	-
平均勤続年数(男性)	8	26.50	12.39	28	5	40	-
平均勤続年数(女性)	6	19.67	14.67	16.5	3	43	-

従事者数の合計は男性が 26 人で女性は 24 人である。

従事者の平均人数は、男性が 2.4 人、女性は 2.2 人。男女合計で見たときの従事者数の平均は 4.5 人。過去の調査では碍子関連の会社を除いた従事者数の平均は 9.2 人なので半減していることが分かる。

年齢は、男性の平均が 54 歳、女性は 52 歳。なお過去の調査では、男性は 50 代が最も多く、女性は 40 代が最も多かった。

次に勤続年数は、男性の平均は 26 年、女性は 19 年。過去の調査では男性は 21 年以上が最も多く、女性は 5 年以内が最も多かったのが、今働いている女性の多くが長いキャリアを積んでいることが分かる。

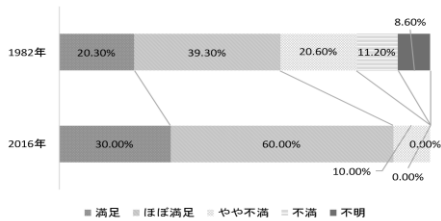
従事者の出生地について、男性は本郷<sup>2</sup>出身者より会津地域出身が多数を占めていた。女性には大きな変化は見られなかった。

<sup>1</sup> 1951年に会津短期大学として開学。1993年に会津大学短期大学部に名称変更。

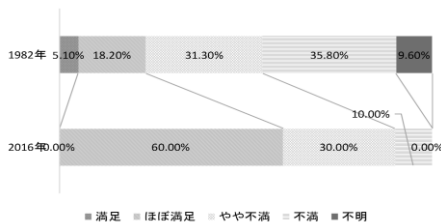
<sup>2</sup> 本郷町は 2005年に市町村合併し、現在は会津美里町に属する。

図表 6 から図表 9 は労働時間, 賃金, 仕事, 職場の人間関係の満足度を調査した結果である. どの項目も過去の調査と比べると, 満足からやや満足の割合が増加していることがわかる. 特に仕事そのものに対する満足度は過去の調査では5割であったが今回の調査では9割となり, 最も大きく増加した.

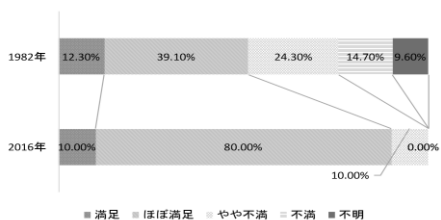
図表 6 労働時間の満足度



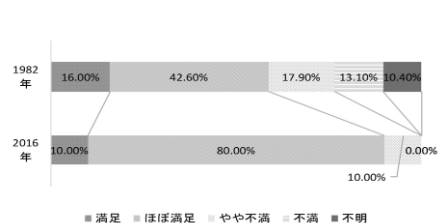
図表 7 賃金の満足度



図表 8 仕事そのものの満足度



図表 9 職場の人間関係の満足度

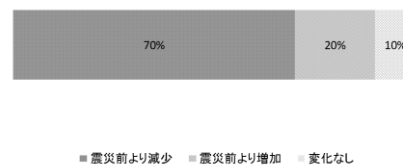


次に事業継承について, 継承したいと考えていて後継者もいると回答した窯元が 6 割, 継承しないと考えている窯元が 4 割の結果となった. 今回の調査では, 継承したいと考えているが後継者がいないと回答した窯元はなかった. また, 後継者育成のために行っている活動としては, 研修を中心とした従事をさせる, 会津本郷焼後継者育成事業の運営に協力しているという回答があっ

た.

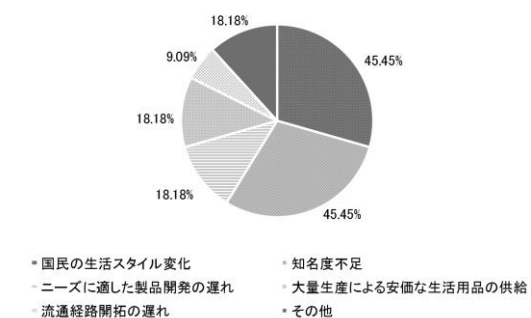
図表 10 の年間生産額については, 東日本大震災(2011)より減少していると回答する窯元が 7 割を占めている. 震災後, 観光客が減少したことで生産額に影響が出ていることが確認できた.

図表 10 年間生産額



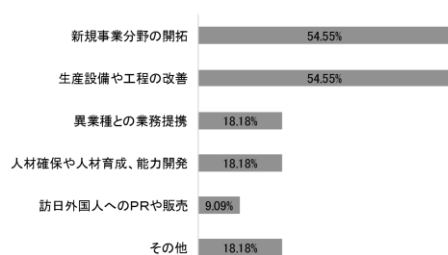
図表 11 は会津本郷焼が最も直面している課題である. 国民の生活スタイルの変化によるもの, 知名度不足という回答が多かった. 伝統的工芸品産業振興協会(2008)による調査でも陶磁器分野では産地の知名度やPR が足りないこと(54.8%)が課題の上位であることから本郷焼でも同様の課題があることが分かった.

図表 11 会津本郷焼が直面している課題



図表 12 は今後取り組みたいと考えている活動について調査した結果である. 新規事業分野の開拓, 生産設備や工程の改善の回答が多かった. これらはものづくり企業一般の調査でも重点分野と考えられており, 日本の産業に共通した方向性といえる(経済産業省他 2016). その他としては, 個展の開催や情報発信といった回答がよせられた.

図表 12 今後取り組みたいと考えている活動



## 5.2 ヒアリング調査

### 5.2.1 ヒアリング調査の概要

本郷焼の窯元に対して本郷焼の現状や経営戦略、今後の課題についてヒアリング調査を行った。

調査日時:2016年12月11日

ヒアリング先:宗像窯 宗像利浩氏

### 5.2.2. ヒアリング調査の結果

宗像窯の当主へのヒアリング調査から以下のことが確認できた。

陶磁器の市場は年々減少しており、会津本郷焼についても、生産額は減少している。ただし窯元数、従事者数はあまり減少していない。また会津本郷焼は知名度が低いため、これからブランド力をつけていく必要がある。

会津本郷焼を知ってもらうために、都市部などで展示会を行い、人とのつながりを作ることを行っている。

今後の課題としては、新しい商品を作る前に、きちんと情報発信できる体制を整備する必要がある。

## 6. まとめと考察

本研究の結果、会津本郷焼に関しては1982年時点と比べて労働時間、賃金、仕事そのもの、職場の人間関係において満足度が増加していることがわかった。特に、仕事そのものに対する満足度が増加していることは今後、後継者が会津本郷焼を維持していくことに好影響を与えると期待できる。また、他の伝統的工芸品では後継者の確保が大きな課題となっているが、現在会津本郷焼の窯元では確保できており、また、後継者を育成する事業も行われているため、直ちに改善を急ぐ必要はないと考えられる。

一方、知名度不足の課題は他の伝統的工芸品でもあげられており、共通の課題となっていることが分かった。この課題を解決策するために、例えば九谷焼ではUSBメモリの外装を行ったり、輪島塗では蒔絵技術を用いたスマートフォン用カバーを製造したり、情報通信分野への活用を目指した動きがみられる(日本銀行金沢支店2012)。こうした動きは伝統的工芸品の知名度を上げるだけではなく、新たな販路の開拓へとつながるため、伝統的工芸品の売上の低迷を解決へと導く有効策になると考えられる。

## 7. 今後の課題

残された課題は、どのような戦略が伝統的工芸品の知名度の向上に最も効果をもたらすかを考察することである。他の産地で実際に行われている戦略を比較研究し、会津本郷焼の知名度の向上に有効な戦略を引き続き検討していきたい。

### 主要参考文献・URL

- [1]内海健寿(1982)「統計表からみた窯業への諸側面—福島県会津本郷へのアプローチを試みて—」『地域研究』第2号 pp.19-20
- [2]経済産業省(2008)『伝統的工芸品産業をめぐる現状と今後の振興施策について』
- [3]経済産業省(2015)「伝統的工芸品指定品目一覧」
- [4]経済産業省・厚生労働省・文部科学省編(2016)『ものづくり白書』
- [5]佐々木篤信(1982)「窯業従事者の生活と意識(1)—福島県大沼郡本郷町の陶業組合を中心に—」『地域研究』第2号 pp.45-47
- [6]伝統的工芸品産業審議会(2000)「21世紀の伝統的工芸品産業施策のありかたについて—新たな生活文化の創造に向けて—(答申)」
- [7]伝統的工芸品産業振興協会(2008)『伝統的工芸品産業調査報告書』
- [8]日本銀行金沢支店(2012)「北陸地域における伝統産業の現状—新たなマーケット開拓などにより活路を見出す動き—」『ほくりくのさくらレポート vol.15』